

博物館と市民が共創するプロセス構築に向けた基礎的研究 ～長崎歴史文化博物館と劇団ちゃんぽんの協働を事例に～

発表者・共同研究者：○田近拓也（慶應義塾大学総合政策学部）、高橋武俊（慶應義塾大学政策・メディア研究科助教）、玉村雅敏（慶應義塾大学総合政策学部准教授）、鈴木和博（株式会社乃村工藝社）、小島敏明（株式会社乃村工藝社）

キーワード：長崎、博物館、協働、共創、市民

0. 概要

2005年11月の開館当初より、民間企業が指定管理者として運営をしている長崎歴史文化博物館では、非営利の市民団体「劇団ちゃんぽん」が、再現された長崎奉行所立山役所を舞台に約20分の寸劇を来館者サービスとして提供している。この寸劇には、学芸員が江戸時代の犯科帳（裁判記録）を元に作成した台本が使われており、公演機会が土日・休日と限られているものの、顧客満足度の高い代表的なサービスとして位置づけられている。

歴史文化の博物館と寸劇の公演を目的とする市民の愛好家集団とが共に、「来館者への教育」「施設の魅力向上」「地域貢献」など、複数の関係者がwin-winとなる高い価値を生み出すイベントを提供している。「価値の共創」を実践している同事例は、今後のイベントの果たす役割に示唆を与えるものである。本稿では基礎的研究として、その協働の経緯の整理を通じて、「博物館と市民団体との協働事業における質・継続性の担保」の要因を抽出した。

1. 目的

博物館と自律的な市民団体との連携によるイベントの質と中長期的な継続性を担保するプロセスづくりに向けて、本稿では、長崎歴史文化博物館と劇団ちゃんぽんの協働事業である寸劇を事例に、各主体が見出している価値と課題の整理を通じて、イベントの質・継続性の担保に有効に作用した要因の抽出を目的とする。

2. 方法

寸劇関係者にとっての価値と課題を把握するために、2008年12月から2009年2月にかけて長崎歴史文化博物館の「劇団ちゃんぽんの総合担当者」「寸劇を監督する歴史文化の研究者」「広報担当者」「教育担当リーダー」、並びに劇団ちゃんぽんの「座長」「座員」に対し、「①業務内容」「②他の関係者への意識」「③過去・現在・今後のイベントへの意識」を尋ねるインタビュー調査を実施した。

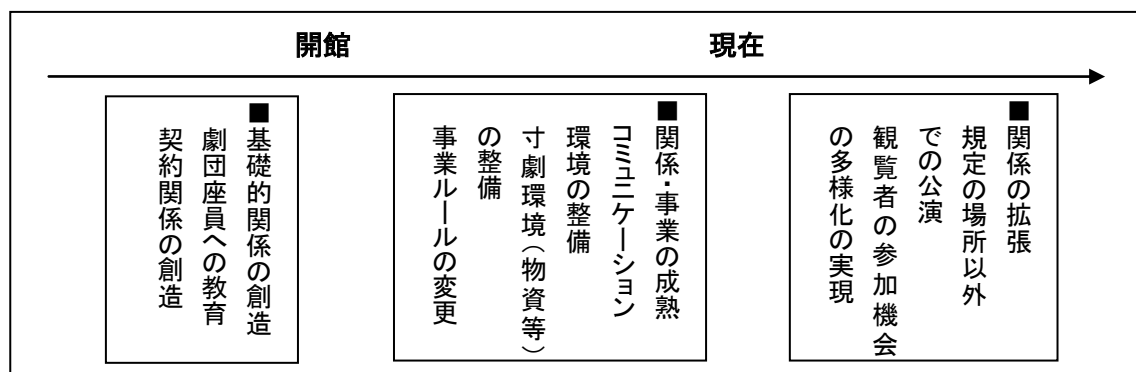
3. 結果

寸劇の継続的实施による関係者にとっての価値と課題は図表1の通りである。館側はサービスの充実、劇団側は満足感の充実が価値として挙げられる。更に館が寸劇の核となる質（歴史文化）の保証をしていることや勉強機会の確保に協力していることが、劇団にとっての満足感に繋がっていることが特徴的である。一方の課題については、現在までに双方の検討を経て多少なりとも改善への取り組みがなされているが、長らく問題であり続けている事項である。例えば、サービス管理において、館側は定期的実施しているアンケート調査から間接的に、劇団側は実演中の観客の反応から直接的に把握しているため、課題の認識にはギャップが生じており、舞台環境（照明・音響・空調等）の設備の充実を検討する際にも、史実に忠実な状況を維持したい館と、観客の観覧環境の充実を望む劇団とで意見の衝突が繰り返されている。

	長崎歴史文化博物館	劇団ちゃんぽん
価値	娯楽機能の拡充 教育素材の確保 集客効果の向上 利害関係者・情報経路の拡張	理念の実践（自己実現の場） 活動場所・機会の確保 観覧者の確保 質（歴史の精緻さ）の保証 勉強機会の確保
課題	費用負担・物品管理等の複雑化 間接的なサービス管理の難しさ	拘束時間の長さ 設備充実に向けた調整の複雑さ 費用・人材確保の難しさ

【図表 1：寸劇の価値・課題】

しかし、これらの意見の衝突については減少しつつある。その要因としては、契約を結ぶことで双方のビジョンを担保すること、寸劇を提供する上での舞台環境の整備が一定の水準に達したこと、安定的に寸劇を実演するための連携の段取りやノウハウが形になってきたこと、館内のコミュニケーションの頻度を増やす環境ができたことにより相互理解が促進したことが挙げられ、現在はより発展的な公演方法の模索へと双方の意識が移っている。



【図表 2：劇団ちゃんぽんと長崎歴史文化博物館の関係の変遷】

4. 考察

長崎歴史文化博物館の寸劇より、博物館と市民団体との協働事業におけるイベントの質の担保の際には、「①コンテンツの内容の質は専門家が監督する」「②コンテンツの提供の質は市民団体の裁量に委ねる」が、イベントの継続性に関しては「①契約によるビジョンと独立性の担保」「②コミュニケーション環境の構築」が要因として考えられる。

特に、経済的条件が主たる動機づけとならない市民団体と継続的な協働事業を実施する上では、先述の要因に加え、「①博物館と市民団体は従属的な関係ではなく、自律的な組織としての対等な関係を前提」とし、「②連携してイベントを構築していくプロセスを共有する基盤」が必要であると考察される。

5. 結論

長崎歴史文化博物館と「劇団ちゃんぽん」は、長崎文化への愛着と発信の方法において活動理念が一致した自律的な組織として協働し、イベントを設計するプロセスを共有した。この経験が双方の進化と更なる価値を共創し、より発展的なイベントの実現へ向けた役割を導き出すことへ繋がっている。これらを支える基盤を構築することが、博物館と市民団体の協働事業において質と継続性を担保する上で欠かせないものである。